

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)

留学結果報告書

令和 7 年 6 月 11 日

山梨県知事 殿

本人氏名 丸山 美菜子

次のとおり留学の成果を報告します。

留学先国名	オーストラリア
学校等名	シドニー工科大学
留学期間	令和 6年 7月 25日 ~ 令和 7年 5月 21 日

私は、オーストラリアのシドニーでの約10か月の交換留学を通して、自分の将来やグローバル化が進むこれからの社会に必要な考え方は何なのかを学ぶことが出来た。多くの学びの中から主に2つの学びを成果として報告しようと思う。

一つ目は、「多文化理解の重要性」と「自国の文化を守る意識」の双方が、これからのグローバル社会を生きる上で不可欠であるということである。オーストラリアは移民国家として、長い年月をかけて多様な人種・宗教・文化を受け入れてきた国である。シドニーという都市には、アジア系、ヨーロッパ系、中東系、アフリカ系など、実際に様々なバックグラウンドを持つ人々が共に生活しており、街を歩くだけでもその多様性を肌で感じることができた。実際、大学の授業でも多文化共生をテーマとしたディスカッションが頻繁に行われていた。例えば、異なる宗教観を持つ人々が学校や職場でどのように配慮し合うべきか、あるいは文化的な価値観の違いがビジネスにどのような影響を与えるかなど、実践的な内容が議論されていた。ある授業では、オーストラリアで働いている人に実際にインタビューを行い、オーストラリアでの仕事環境から多文化共生社会の在り方について考え、プレゼンテーションを行った。こういった授業を通して、文化的背景が異なる人々でも生きやすい環境づくりや、異文化理解をしようとする人々の態度を育成することが、グローバル化が進む世界では重要であることを実感した。

一方で、こうした多文化のるつぼとも言える環境の中で、私は一つの問い合わせに直面した。それは「オーストラリア固有の文化とは何か」という問い合わせである。確かに、アボリジニの伝統文化や英語圏の西洋的な価値観は存在するが、それ以上に、多民族国家としての側面が色濃く、文化的な「核」が見えにくい印象を受けた。多様性を受け入れることに注力するあまり、共通する「国民的文化」や「伝統的な生活様式」が相対的に希薄になっているように感じたのである。

この経験を通じて私は、単に多文化を尊重するだけではなく、自国の文化や伝統を意

識的に守り、継承していく姿勢の重要性にも気づかされた。仮に将来、日本がよりグローバル化し、多様な文化的背景を持つ人々が共に暮らすようになった場合、日本独自の価値観や伝統が失われる可能性も否定できない。例えば、年中行事や季節の食文化、言葉遣いなど、普段は当たり前と思っている文化も、少しずつ形を変えてしまうかもしれない。だからこそ、多文化共生の実現には「多文化理解」と「自文化保持」という、いわば相反するように見える二つの視点を、同時に持ち合わせる必要があると私は考える。多様性を認めることは重要であるが、それが自文化の希薄化やアイデンティティの喪失につながっては本末転倒である。私たち一人ひとりが、自国の文化に誇りを持ち、その価値を正しく理解し、他者にも丁寧に伝えていくことが、多文化共生を健全に進めるための土台となると強く感じた。

二つ目は、これから日本での英語教育は海外の授業のように、よりディスカッションなどの対話を取り入れた授業にしていくことの重要性である。オーストラリア・シドニー工科大学での留学生活は、私にとって単なる語学学習にとどまらず、教育に対する新たな視点を得る貴重な経験となった。特に、英語教育における「伝える力」と「対話する姿勢」の重要性を実感し、将来、高校の英語教員としてどのような授業を創り上げていくべきかを深く考えるきっかけとなった。

まず、留学を通して最も大きく変化したのは、英語に対する意識である。留学前の私は、英語とは「正しく話す」ことが重要であり、文法や語彙の知識をいかに多く身につけるかに重点を置いていた。しかし、現地での生活や大学の授業を通じて感じたのは、英語力の高低以上に、「話そうとする態度」がコミュニケーションの成否を分けるという事実であった。片言であっても、自信を持って伝えようとする姿勢があれば相手も真剣に耳を傾けてくれる。逆に、どれだけ正確な英語を知識として知っていても、発信しようとしなければ対話は成立しない。この体験は、私がこれから英語教育を担っていく上での根幹となる視点となった。

近年、日本の教育現場では「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。特に、GIGAスクール構想のもとで1人1台の端末環境が整備され、ICTを活用した個別最適化された学びが可能となった今、英語教育の在り方も大きく変わろうとしている。私は、これから英語授業においては、単に知識を教えるだけでなく、生徒が実際に英語を使って「誰かと話す」「意見を述べる」「考えを深める」機会を日常的に設けることが重要であると考えている。

その実現のために、例えばICTを活用して海外の学生や英語話者とオンラインで交流できるような授業を導入したい。留学中、私が実際に現地の人と会話を交わしながら英語の運用力を身につけていったように、生徒たちにも「英語を使う場」がリアルに存在することで、学びの意義が大きく変わると確信している。また、こうした体験は英語だけでなく、多様な価値観に触れる機会ともなり、グローバルな視野を養う助けにもなる。

さらに、海外の大学での授業スタイルにも多くの刺激を受けた。シドニー工科大学では、学生が授業中に積極的に発言し、自らの意見を明確に述べることが当たり前であった。講義を受け身で聞くだけでなく、ディスカッションやグループワークを通して、他者と意見を交わしながら自分の理解を深めていく授業スタイルが非常に印象的であつ

た。中には、自分とは異なる文化や価値観を持つ学生同士が激しく意見を交わしながらも、互いを尊重し合う姿勢が貫かれており、対話を通じた学びの深さを実感した。

このような経験から、私は将来、生徒たちが自ら考え、他者と対話を重ねながら学びを深めていくような授業を創造したいと考える。たとえば、英語の授業の中にディベートやプレゼンテーションの要素を積極的に取り入れ、言語を「使う」を中心とした活動を開拓したい。生徒一人ひとりが自分の意見を持ち、それを英語で表現することを通じて、自信や主体性を育むことができると信じている。

また、教員自身が常に学び続ける姿勢を持つことも不可欠であると感じている。私自身、留学によって学びの幅が広がったように、教師となった後も国内外の教育実践に触れ、自らの教育観や指導法をアップデートし続けていきたい。変化の激しい現代において、生徒とともに学び成長する教師こそが、真に信頼される存在であると考えるからである。留学を経て得た実践的な英語力と、海外の授業文化への理解は、今後の私の教員人生において大きな財産となる。これらを教育の現場で存分に活かし、生徒たちが世界とつながる力を身につける手助けをしていきたい。

留学を通じて得たこの気づきは、今後の私の人生において大きな指針となるだろう。国際的な場で働くことを志している私にとって、異文化を理解し受け入れる姿勢は不可欠であると同時に、日本という文化的アイデンティティを大切にしながら、自分の意見や価値観をしっかりと発信できる力も求められる。そのために、今後も国内外の人々と積極的に交流し、相互理解と相互尊重の精神を育み続けていきたい。

私はオーストラリア・シドニーでの約10か月間の交換留学を通じて、多文化理解と自己文化の保持がこれからグローバル社会において不可欠な要素であることを強く実感した。シドニーのように多様な文化や背景を持つ人々が共存する環境で生活し、異文化を尊重し受け入れる姿勢の重要性を学んだ一方で、自国の伝統や価値観を意識的に守り、後世に継承していくことの必要性にも気づかされた。単に多文化共生を推進するだけでなく、自文化の独自性や誇りを大切にすることが、眞の意味での共生社会を築くうえで欠かせないと感じている。また、留学先の教育現場からは、英語教育において単なる文法や語彙の知識習得にとどまらず、生徒が主体的に対話し、積極的に自分の考えを発信できる授業づくりが求められていることを学んだ。特にICTを活用した海外の学生とのオンライン交流や、ディスカッションの導入によって、生徒が実際に英語を使ってコミュニケーションを取りながら、自らの考えを深めることができる環境の整備が非常に重要であると感じた。こうした実践的な英語運用能力の育成は、今後の日本の英語教育において欠かせない課題であると確信している。

これらの経験は、私が将来、高校英語教員として、異文化理解とコミュニケーション能力を育む授業を創造するうえで大きな基盤となるだろう。今後も自己文化への誇りを持ちながら、国際社会で自分の意見や価値観をしっかりと発信できる人材を目指し、国内外の人々との積極的な交流と継続的な学びを続けていきたいと考えている。